

学校名	神戸大学附属中等教育学校

活動のテーマ	中等教育学校総合的学習における自然災害をテーマとした継続的かつ大規模な学校間交流の企画と実施～大震災被災地間の学校交流神戸・仙台モデルの構築を目指して～
主な教科領域等	理科（地学）・社会（地理）・総合的学習（卒業論文）
対象学年／参加生徒数	第 4, 5 学年 _____ のべ 30 _____ 人 （複数可）
活動に携わった教員数	_____ 4 _____ 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	_____ 人【保護者 ・ 地域住民 ・ その他（ _____ ）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加した人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	平成 27 年 3 月 1 日 ～ 平成 28 年 3 月 31 日
想定した災害	複数可： 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（ _____ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

被災地体験を共有する神戸市と仙台市の高校生が交流しながら、大規模震災に対するリスクマネージメントについて多角的な視点から話し合い、提言をまとめ、被災地間の学校交流「神戸・仙台モデル」の構築をめざす。具体的には、神戸大学附属中等教育学校と仙台市立仙台青陵中等教育学校の後期課程生徒を対象として、本活動では両校の生徒たちが交流しながら、

- (1) 身近な地域に起こった、あるいは今後起こるであろう自然災害について共に学ぶ
- (2) 震災の記憶をどのように後世に伝えていくかを共に考える
- (3) 上記活動を通して、他を思いやることのできる生徒を共に目指す

ことを主たる目的とし、継続的な大規模震災の被災地間の学校交流モデル「神戸・仙台モデル」の構築を目指す。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

- 2015 年 3 月 10-13 日 仙台周辺ボランティア参加・仙台交流校開拓
- 2015 年 7 月 14 日 復興庁本庁・東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）視察
- 2015 年 8 月 3-5 日 仙台市立仙台青陵中等教育学校訪問・被災地視察・交流活動
- 2015 年 9 月 日本地理学会秋季学術大会（愛媛大学）発表、10 月 東北地理学会秋季学術大会（上越教育大学）発表
- 2015 年 10 月 19 日 私立灘高等学校生徒会との仙台交流活動に関する意見交換会
- 2015 年 12 月 15-17 日 仙台交流活動プログラム
（東北学院大学、宮城大学、多賀城高等学校、尚絅学院中学校・高等学校交流）
- 2016 年 3 月 11-13 日 仙台市立仙台青陵中等教育学校訪問・震災記念イベント等参加（予定）
（松島高等学校、東北大学東日本大震災ボランティア支援室、仙台白百合学園中学高等学校交流）
- 2016 年 3 月 日本地理学会春季学術大会（早稲田大学）発表（予定）、5 月 東北地理学会春季学術大会発表（予定）

3) 9 月研修会での学びから自校の実践に活かしたこと、研修会を受けての自校の活動の変更・改善点、昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点、助成金の活用で可能になったことなど。

●助成金により、複数名の生徒を仙台に引率することができ、貴重なプログラムを体験させることができた。また、その体験や学びを全校集会・学年集会で発表することにより本校全体で共有することができた。



2015年12月仙台プログラム(a)簡易ボーリング体験 (b)東北大学リーディング大学院交流

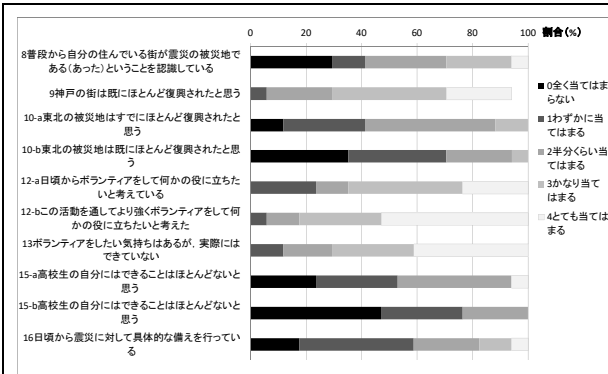
4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

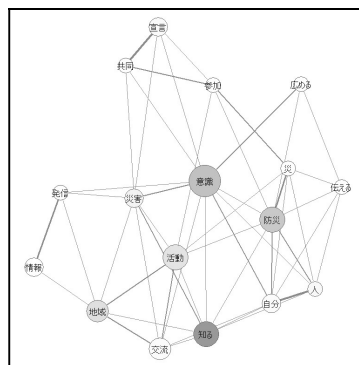
神戸大学附属中等教育学校と仙台青陵中等教育学校は以下の「神戸仙台共同宣言」を策定し、中長期的交流活動の基礎を築けた。

- 両校は、地元の災害を元に各校生徒の災害に対する意識の向上に努める。
- 両校は、この活動を共有し、協力し合うものとする。
- 両校は、各校周辺住民と共に、各地域の災害に対する意識の向上に貢献する。
- 両校は、両校にとどまらず、全国の高校生と共に、災害に対する意識の向上に努める。
- 両校は、有事の際に最大限の協力をを行う。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。



第1図：交流活動による生徒の意識の変化



第2図：キーワードのネットワーク

(これからの私が出来ることは何か)

本活動は生徒にとって以下のような効果があった(第1図)。

- 被災地間の学校どうしの交流活動がお互いの土地で起こった震災に改めて目を向け、その現状を知る大きなきっかけとなった
- 復興が実際には進んでいない現状を見ることが生徒どうしがディスカッションを行うことで、これまで以上に自分から震災に関わり、何かできることをしていきたいと前向きに考える大きなきっかけとなった
また、交流活動を経て、生徒たちが以下の様な認識を持つようになったことがわかった(第2図)。
- 防災について知り、意識を高め活動することともに、学んだことを広め、伝えていくことが重要である
- 活動においては、地域との交流が重要であり、地域の災害に対する特性についても知る必要がある
- 活動終了後も共同宣言を常に意識し、今後の活動にも積極的に参加していきたい

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

被災地を訪問し、交流することによって、生徒にとって「遠い自分には無関係の被災地」が「大切な友人のいる仙台」に変わり、被災地への想いが大きく変化したことが特筆できる。

5) 自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

「単なる被災地訪問」で終わることなく、SGHの活動や卒業研究と関連付けることができた点

6) 実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

今後も継続的に仙台訪問プログラムを実施し、全校的に被災地間交流を実施していきたい。